

Title	徳川封建經濟の研究(高橋龜吉著, 先進社發行)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.2 (1932. 7) ,p.180(326)- 181(327)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320700-0180

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ない。近時經濟生活の重要性が益々強調せらるる結果として、わが史學界においても經濟史的研究が特に著しくなつたが、本書のごとき、その良き結果の一つであらう。(松本芳夫)

徳川封建經濟の研究

(高橋龜吉著)
(先進社發行)

本書は著者高橋氏が氏一流の經濟史觀に立脚して、徳川時代の經濟的發展と、當時の最も重要商品たる燈油・生糸・棉花・砂糖等の商品經濟方面から論究したものであつて、徳川時代に於て漸次資本主義的產業組織の發達し來れる實相を究め、以て明治時代の資本主義への連鎖を説明したものである。蓋し一口に徳川三百年の封建時代と稱するも、實はその初期と末期との間には政治上經濟上その他文化の各方面に於て著しい變遷が存するのであつて、徳川時代に於ける或る一つの文化現象を捉へて論究せんとする者は必ずや全時代を通じての發展の過程を辿らねばならぬ。然るに徳川時代の經濟史に關する文獻は頗る多きに拘らず、此の時代の經濟生活の發展過程を論述したものは比較的稀少である。從つて既に徳川時代に於て經濟社會が或る程度まで資本主義化して居たとするも、明治時代に於て歐米の資本主義を受け入れるに好都合なる素地が、どの程度にまで形成されてゐたかを詳細に知ることが出來なかつた。然るに本書に於ては此の點が最も具體的に解説されてゐるのである。所が又、著者によれば、徳川時代の資本主義的經濟組織の發達は封建制度の爲に著しく阻止されてゐたとす。即ち資本主義的經濟組織の發達が封建制度を崩壊せしめる要

因とはなつたが、その反対に亦、資本主義的發達が封建制度そのものゝ爲に幾多の掣肘を受けて、或る程度に制限されたのである。著者は此の事實を説明せんが爲に、當時の爲政者側から、諸産業の上に加へられた幾多の政策に就て、詳細に論述するところがある。次に本書編成の大要を見るに、先づ第一編に「徳川封建制度の經濟的機構」と題して、徳川封建經濟の本體を詳述し、第二編の幕末に於ける封建制度崩壊の經濟的研究」に於ては徳川封建制度の崩壊の經濟的必然性を説いてゐる。共に精細明達なる説明であつて、氏の經濟史觀を窺ふべき貴重なる論説ではあるが、量的に見ても本書の序論と認めて差支なきものであらう。即ち本書の主部は第三編以下であつて、第六編までの各編に於て、燈油・蠶糸・棉・甘蔗等の商品に就て、その生產の發達や市場の變遷や幕府及び諸藩の政策などを述べてゐる。就中第四編の「徳川時代に於ける蠶糸業の變遷及發達」は、幕府及び諸藩の蠶糸業保護獎勵、機業の發達に伴ふ蠶糸業の發展、幕末に於ける生糸の海外輸出、織物・製糸の分業化に伴ふ生糸の商品化、更に養蠶業の發達等に就て詳細に説述してゐる。恐らく蠶糸業に關する最も纏つた文獻の一であらう。此の他第三編の「徳川幕府の燈油價格の統制と其組織」に於ては、製油の配給や價格に對する幕府の統制を詳述し、封建經濟から資本主義經濟に移る過渡期に於て幕府の採用せる折衷的政策を説明してゐる。第五・六の兩編に於ては、それぞれ棉花と甘蔗について、その經濟的發達の事情を述べてゐる。さて、經濟史觀に立脚する學者はとく偏見や獨斷や誇張に陥り易いものである。本書に於ても或は此の種の缺點が見られはしまいかとい

を繙いた時、この著者に對する甚だ失敬な豫想は全く的外れであつた。著者の立論には何者の偏見もない、何等の誇張も獨斷もなければ又矛盾も存しない。在りのまゝの事實を在りのまゝに述べ、然かも著者が簡明せんとする要點の中心を衝いてゐる。序文に見ゆるが如き著者の遜辭は無用であらう。徳川時代の經濟史に關する貴重な一文獻として推頌する次第である。(有賀春雄)

(昭和七、三、十五、武田勝藏)

神社と史蹟

(西宮市武庫郡
神職會編發行)

西宮市武庫郡神職會に於ては、神明奉仕の傍、愛郷の觀念の普及として、年來同地方郷土資料の調査と、これが蒐集保存に盡力せられ、既に史料展覽會を催し、又史料目錄を上梓し、今次、更に本書の上梓を見るに至りしは、寔に欣幸に堪えぬ。

本書は西宮市・武庫郡内の神社と史蹟に就いて市町村別に、其の梗概を錄し、又顯著なる名勝天然記念物をも併載し、加ふるに傳説地も採錄せられて居る。猶ほ史蹟は努めて其の由來を闡明にし、更に參考書目をも附記して居る。

輓近、文明の顯著な進展に連れて、四時の名勝、祖先の史蹟は、鐵路の開通により、又都市の膨脹により、或は破壊され、或は全滅されつゝある。これ又止むを得ざることなるも、實に追憶感慨無量なるものがある。かゝる秋に神職會に於て郷土史料として、祖先の崇敬厚かりし神社、又子孫に幾多の示教を殘す史蹟を錄せられしは、既述の如く愛郷精神の涵養には勿論なるも、引ひては

獨逸國精神の誇導となり、更に我が國體擁護の振起ともなることは云ふ迄もない。

方今、國家の内外共に多事なるに際し、かゝる有益の書の上梓を見るは、時宜を得たるものと滿腔の敬意を表するものである。

(昭和七、三、十五、武田勝藏)

The End of Reparation; The Economic Consequence of The World War.

By Hjalmar Schacht. Ed. by George Glass.
Gov. 1931. London & New York.

「ヴエルサイユ媾和條約は條約ではない、それは平和を齎さなかつた。條約の本義は雙方が夫々の立場を述べた後、相互の協定に到達することである。ヴエルサイユ條約は一方のみによつてされた」。著者は本書の冒頭に於てかく記してゐる。これは恐らく獨逸人全體の意見を代表したものであらう。而してこれは今日多くの獨逸人を驅つて右翼政黨に轉向せしめつゝある主要なる動機と考へられる。

第一章に於てヴエルサイユ條約の責任を論じ、第二第三章に於て如何なる方法によつて獨逸が賠償金を支拂ひ來つたか、又如何に賠償金の支拂が獨逸を苦しめつゝあるかを述べ、第四章以下に於てドーバー案よりヤング案に至るまでの經緯を説明してゐる。

著者は前獨逸國立銀行總裁として或は財政専門家會議の代表として賠償問題の實際に參與し、一九二三年より一九二九年に至るまで獨逸の財政的危機を打開することに努めた人である。それ故、彼の説に多少正鶴を缺く點のあることは止むを得ないとして、兎に角本書は過去十年間に於ける獨逸の經濟狀態の推移を知る上に甚だ貴重なるものといふことが出来る。(恒松安夫)